令和八年度　山口県立大学　国際文化学部　文化創造学科
学校推薦型選抜（県内高校枠）「小論文」　問題用紙

問　次の文章を読み、その要旨を示したうえで、作品を鑑賞することの在り方について、具体例を挙げて、あなたの考えを八〇〇字以内で述べなさい。

ある対象物を「作品」として「鑑賞」するための仕掛けである美術館に、他の館種のミュージアムでの観覧とは異なるまなざしが要請されることは、確かであるように思われる。美術館での鑑賞は、他のミュージアムでの観覧行為と、一線を画している。しかし、そうであるならば、鑑賞とは、究極的には、どのような行為であるべきなのだろうか。たとえばそれは、あくまでも個人の感性に根差す個人的な営為であるべきなのか、それともそこには他者との協働の可能性が開かれているべきなのか。こうした問いは、なかなかの難問である。

わたしたちは近年、芸術作品の前での語らいに積極的な意義を付与しようとしてきた。とりわけ芸術の「教育」という局面においては、その傾向が顕著である。たとえば、二〇一五年の著作のなかでオルガ・ヒューバードは、この二〇年間、展示室内での対話こそが美術館教育で中心的役割を果たしてきたのだと総括している。あるいは、ニューヨークのフリッツ・コレクションで美術教育を実践してきたリカ・バーナムらは、絵の前においては、「たくさんの声は一つの声より良いものだ」と主張する。すなわちバーナムらによれば、「芸術作品について人びとがもつ最も重要な理解のなかには、対話のなかで至る理解が含まれる」のであり、さらには、「よいティーチングは、個人の鑑賞者には至ることができない共有された理解を育む」のだというのである。ほかにも、日本にも紹介され、先述した対話型鑑賞（注1）をひろめるきっかけとなったアメリア・アレナスやフィリップ・ヤノウィンが説くヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ（注2）など、作品の前での語らいの実践は、枚挙にいとまがないほどである。

要するに、今日の美術館においては、誰かと語り合いながら作品への理解を深めたり、これを味わったりすることが、ごく日常的な光景となっている。一枚の絵について何かを語ること、絵に何かしらの言葉を沿わせてみることが、その絵を理解し、解釈し、ひいては絵をより深く愉しむための一つの方途であることは、もはや疑い得ないようにも思われる。

けれどもその一方で、教育という局面に話を限ってみたとしても、語らいではなく沈黙が鑑賞の肝であるという考え方は存在する。二〇世紀前半の事例になってしまうが、たとえばニューヨーク近代美術館の礎を築いた人物として知られるアルフレッド・バー・ジュニアのレクチャーは、そのような信念に貫かれていたようである。多くのスライドをみせながら行われたという彼の講義は、長い沈黙を繰り返すことで、聴衆を困惑させるほどだったと伝えられている。このことに関連して、ある書簡のなかでバーは、多弁を弄する美術講師のやり方を批判しつつ、そうした方法に接する聴衆は「一時間ほども受動的に聴いていれば、理解するのに何年もかかる事柄を理解したと信じさせられてしまうのだと警告している。こうして、一方的な講義形式による教授を嫌うという点において、バーの出発点は現代の対話型鑑賞の理論と同じではある。けれども彼は対話とは別の方法を採る。その方法とはすなわち、「沈黙と中立性によって」、聴衆に自分自身の意見を形成させることである。対話によってではなく沈黙によって、バーは鑑賞教育を行おうとするのである。

アルフレッド・バー・ジュニアのレクチャーの事例は、今日のわたしたちの眼にはいささか極端なものであるように映るかもしれない。しかしその信念の背景には、美や趣味に関する経験や判断はわたしの内から自然に生じるべきものであり、他者から強要されうる類のものではないという、ある意味では伝統的とも言うべき根強い考え方があることは疑いえない。ここでは、そのような考え方のもっとも象徴的な、そしてまた決定的な一事例として、エマニュエル・カントを引いておこう。『判断力批判』のなかでカントはこのように書き記す。

> 何びとにせよ或る建築物や景色（あるい）は詩を自分で美しいと思うのでなければ、たとえ百人の声が一斉にこれを称揚したところで、それによって心からの同意を強いられるものではない。
>
> （カント『判断力批判（上）』、篠田英雄訳、岩波文庫、一九六四年、二一五ページ）

念のために申し添えておけば、もちろんこれは、美しさをめぐるコミュニケーションが人びとのあいだでまったく成立しえないという意味ではない。カントは、同じ対象に対するときには、基本的には（余計な条件に妨げられていなければ）万人が同様の判断に至るだろうと考える。みなが同じものを美しいと判断する可能性が確保されているという意味で、ここには、美しさを介したコミュニケーションの道が開かれているとも言えるだろう。ただ、他方で彼は、引用文中にもあるように、その美しさに関する判断や経験を、外から、ことばによって植えつけられるような事態は特に想定していない。つまりカントは、いままさに美的な経験をしている人がその経験をことばによって別の誰かに正確に伝達したり、あるいはそのようなことばによって他者の趣味判断を外から変えたりすることは念頭に置いていないのである。わたしたちは、他者からの説得のことばをまたずして、おのずから、自分の内から、何かを美しいと感じ味わうのでなければならない。だからカントは、よく知られている趣味の「規則」が自分の判断に合致しないときでも、「私は耳をふさいで、いかなる根拠をもまたいかなる理屈をも聞こうとしないだろう」と述べるのである。

（出典　今村信隆『「お静かに！」の文化史――ミュージアムの声と沈黙をめぐって』文学通信、二〇二四年、一四三～一四七頁による。以上の文章に記述の形式について最小限の手を加えた。）

（注1）専門家の解説を一方的に聞くのではなく、作品から感じたことなどを鑑賞者同士で話し合うことを重視して、作品を鑑賞していくこと。

（注2）ニューヨーク近代美術館で開発された、対話型鑑賞を用いた鑑賞教育プログラム。

令和８年度　国際文化学部　文化創造学科　学校推薦型選抜（県内高校枠）
小論文　出題意図

【課題文の出典】
今村信隆『「お静かに！」の文化史――ミュージアムの声と沈黙をめぐって』文学通信、2024年、143～147頁

【出題意図】
この設問は、展示された作品を鑑賞することの見識を問うものである。筆者は、個人的な営為としての鑑賞と、他者との協働を通じた鑑賞を対比させ、両者の意義を思索している。その意義を具体的に理解できる思考力が身についているかを評価する。また、受験者が、自らの経験や知識に基づいて、自身の考えを日本語で適切に表現できているかを問うものである。